

重点目標	具体的な取り組み(29年度)・担当	実施状況	評価の観点	達成度判断基準	判定	来年度に向けて
幼小連携の充実	園内研究の充実	幼小接続カリキュラムの試案を作成する。	国立教育政策研究所幼児教育センターの幼小接続に関するプロジェクト調査等を元に試案を作成した。	幼小接続カリキュラム試案の作成はできたか。	A:作成ができた B:5割程度作成できた C:作成に着手した D:作成できなかった	A 作成したカリキュラムの試案を実践し、成果や課題を整理したり、実践上明らかになった課題への対応策を検討したりする。
		研究成果が地域の保育関係者に役立つように、発信の仕方(教育研究会、保育を語る会の内容・研究報告の仕方・紀要のまとめ方・分科会の持ち方・講師の選び方)を工夫していく。	第63回幼児教育研究会では保育公開を行うと共に昨年度の研究内容を報告した。その際、共立女子大学の田代幸代氏の公開保育・研究報告の講演を含めた講演を通して、参加者と共に幼児期の教育の今日的課題に対する学びを深めた。 第17回保育を語る会では、参加者にワークシートを配布し、分科会の協議の視点に沿って幼児の姿を参観・分科会に参加できるように工夫した。また、松蔭大学の山下文一氏を招き、5歳児分科会協議において、テーマに基づいた分科会の持ち方や進め方を参加者と実際に演習しながら学んだ。全体講話では新幼稚園教育要領改訂のポイントについて学びを深めた。	地域の保育関係者に役立つような発信ができたか。	A:地域の保育関係者に役立つ発信ができた B:地域の保育関係者に役立つ発信方法を模索し、試行した C:発信方法について模索している D:取り組んでいない	B 地域のニーズと国の動向に応じた研究を進めていくと共に、分科会の在り方についても工夫を重ねていく。また、年間を通じて山下文一先生の指導助言から学ぶ。
	連携・交流活動	年長組と小学校1年生の学年間の交流活動を計画的に行う。	・5/15弁当交流 ・6/6アサガオ交流 ・7/19シャボン玉交流 ・10/17,18秋見つけ交流 ・10/27園工芸作品鑑賞交流 ・10/30秋の自然物での遊び(木の葉搾り出し)交流 ・11/7秋の自然物での遊び(お店屋さんごっこ)交流(幼Aグループ・1の1のみ) ・2/19新一年生を迎える会以上の活動を行った。	年長組と小学校1年生3クラスが学年間で交流活動を計画的に行うことができたか。	A:計画以上にできた B:予定通りにできた C:予定の5割程度行うことができた D:できなかった	A 活動内容について取捨選択したり、改善を図ったりしていく。
		幼小の教員が連携して交流活動の指導案の検討、作成を行う。	1学期は幼稚園が指導案を作成し(2回)、反省と改善を検討できた。2学期は各グループが異なる活動をしていることもあり、指導案の検討、改善までできなかった。しかし、その都度、活動のねらい、内容について話し合い、振り返りを積み重ねてきた。	交流活動の指導案の検討作成を行うことができたか。	A:十分にできた B:5割程度できた C:3割程度できた D:できなかった	B 活動ごとに、指導案を基にした事前打ち合わせと振り返りを行い、記録を積み重ね、次年度に生かせる形に整えていく。
	外部研修会へ参加	金沢市小教研(生活科)へ参加する。	9/14南小立野小2年生生活科研究授業を参観した。 1/11金沢市小教研保健部会で、健康診断(視力検査)について、幼小連携の視点から発信することができた。	小教研に参加することができたか。	A:全ての日程に参加できた B:5割程度参加できた C:3割程度参加できた D:参加できなかった	C 参加できるよう園行事などの日程を調整していく。
		保幼小連携に関する講演、セミナーなどに参加する。	・8/1～2第66回全国幼児教育研究大会岡山大会「学びに向かう力って何？」 ・8/28県教員総合センター研修「子どもの育ちと学びをつなぐための取組」 ・10/27園研プロジェクト研究成果報告会「幼小接続の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」 ・11/4福井大学教育学部附属幼稚園第28回幼児教育研究集会「つながり合って遊ぶ子どもたち」 ・12/18幼児教育センター研修会 ・1/27三重大学附属幼稚園保育を語る会以上の研究会などに参加した。	講演、セミナーに参加することはできたか。	A:職員全員が参加した B:職員の5割程度が参加した C:職員の3割程度が参加した D:できなかった	A 引き続き、積極的に外部研修に参加していく。
	自然体験の充実	角間の里山での活動の意義を明らかにする。	幼児にとって、自然を身近に感じたり、新たな発見ができた、教員だけではなく、インストラクター、農業従事者とかかわったりしながら、園では体験できないこと、自然とのかかわり方を学ぶ機会となった。里山で活動することで、園での遊びが広がったり深まったりしたと共に、自然に対する価値観が変容していることが明らかとなった。また、活動の意義と関連付けながら、活動のねらいを設定することで、教育的効果を考えてきた。 年長児、年長児保護者、里山での活動に参加した教員にアンケート調査を行った。	意義を明らかにできたか。	A:できた B:5割程度できた C:意義について検討し始めた D:できなかった	B 里山活動が影響していると考えられる園での自然とのかかわりについて、より深く探っていく。 アンケート調査の結果を参考に意義を明確にしていく。
		教員、インストラクター、里山メイトの役割を明確にする。	活動前に打ち合わせを行い、教員、インストラクター、農業従事者と、互いの思いの共有ができた。(6/8) 教員が幼児の実態に合ったねらい等を考慮した活動案を提示し、その活動案を基に、インストラクターから自然プログラムの提案、農業従事者から、米作りの知識や技術を指導してもらうなど、活動の計画、実施において、互いの専門性を生かすことができた。 活動中の健康観察(疲労の具合や体調の変化等)や個の行動を幼稚園教員が把握し、安全に配慮したり、インストラクターに伝えたりする役割が重要であることを再確認した。	役割を明確にすることができたか。	A:できた B:5割程度できた C:役割の明確化の検討を始めた D:できなかった	A 引き続きインストラクター、農業従事者と事前の打ち合わせを綿密に行い、活動のねらいや幼児の姿、互いの専門性を生かした幼児へのかかわり、互いの担う役割について共通理解を図りながら活動していく。
		園庭の自然物を保育に活用する。	草木や木の実などの自然物を集め、飾ったり、遊びに取り入れたりした。また、製作活動などにも自然物を取り入れるなどの工夫が見られた。 集めたものを幼児の手に取りやすい位置に置いたり、自然事象について調べることができるように図鑑等を提示したりなど、興味をもてるような環境構成を行ってきた。 虫などの小さな生き物にも命があることを伝えと共に、大切にすることを伝えることができるように、世話をするか、逃がすかなどを考えられるような機会をその都度つくってきた。 その季節ならではの自然事象や自然物に興味をもち触れ親しむことができるように話題に取り上げてきたことで、積極的に自然物にかかわったり、自然の変化に気が付いたりする幼児の姿が見られるようになった。 園庭の畑やプランターで育てた野菜を、自分達で収穫し、食育活動に取り入れた。その際、野菜そのものの味を感じることができるよう、食べ方を工夫した。 一年を通して、教師も積極的に戸外に出て、幼児と共に楽しんだ。	活用することができたか。	A:十分にできた B:8割程度できた C:5割程度できた D:できなかった	A 引き続き、幼児が自然物や自然事象に興味をもち、かかわったり話題にしたりすることができるように、クラス全体の話題として取り上げ、興味関心を広げられるようにする。 年間を通じて、園庭の自然物を遊びに活用できるように、計画する。 学年に応じて、生き物の世話をすることを通して、命の大切さを考える機会をもてるようにする。
		幼児の自然物とのかかわりを保護者に発信する。	学年全体には、懇談会やおたよりで、発信したり、自然物を活用したり、製作物を家庭に持ち帰らせたりすることを通して伝えてきた。 参観日などに、幼児が自然物を使って遊ぶ様子や自然物を使ってつくった作品を見てもらえるようにした。 個の様子や気づき、自然物を通しての友達とのかかわり等を、降園時や個別懇談会などを利用し保護者に伝えてきた。しかし、全員には伝えきれなかった。	発信することができたか。	A:十分にできた B:8割程度できた C:5割程度できた D:できなかった	B 引き続き、個の様子や気づき、自然物を通しての友達とのかかわり等を、降園時や懇談会を利用し保護者に伝えていく。 幼児の自然物とのかかわりを写真にとって掲示したり、自然物を使ってつくった作品を提示したりなど、発信の仕方を工夫する